

No.151

全仏

11/44.



（成田山大会受付風景）

座談会 仏教徒会議を良くするために

アジア経済の実態と近代化の条件

(2) 関東学院大学教授 原 覚 天
経済学博士

それから、社会学の方ではパーソンズのA・G・I・L図式にもとづく、新しい分析がスメルサー・エーデルマン、モリス、スペイングラールといった学者たちによっておこなわれている。それは、経済発展というのは、ブラックス・ボックスの内閣構造、たとえば政治と経済と文化と社会というものがどう結びつき、どうからみ合っているか、そしてそれを発展させる動因は何か、という研究が始まっておるわけであります。

ただし、ここで申し上げておきたいことは、六〇年代の中頃から今日までの研究というものは、理論的なフレームワークはかなり進んで来ておりますが、理論的なフレームワークでは、実際にアジアの後進国にどれほど役立つかということとは実証できないわけです。それには、どうしても実証的なフレームワークに理論を援用してやってみなければならぬ。そうして、その上で一体、インドならどうという開発方式をとらなければならぬのか、あるいはビルマなら、あるいはタイならと、それぞれの国で開発理論というものが適用の仕方が違ってこなければならぬわけである。これは、ミントという学者も、——この人はビルマ人だけにもっと国別の多角的なモデルを必要とするのだといっております。

実際に、学問的な段階としては、いままさに、真溪先生がおっしゃった問題と、私たちが考えている問題というものが、それから諸先生方がここで論じようとなさる問題と共通している状態にあるのではないかという具合に考えるわけであります。

次に第二の問題、アジアの問題を考える場合、アジアの経済水準というものは一体どのくらいのものか、ということを一応頭の中においておく必要があると思うわけであります。

実はこの間、ある新聞社で座談会をやりましてメンバーは私と東畑先生、東大の川田さんなどでありましたが、そこで、アジアの経済的な思想、アジア民族の経済的な思想というものはどういうものか、ということが議論になりました。そこでの結論は、こういうことなんです。アジアでは、民族自体が古来から経済成長という考え方をもっていないかった。安定を保とうとする考えはあったけれども、金持になろうという積極的な意欲が総体的に低かった、ということなんです。つまり、物的な欲望は極めて小さい。貧しさを卑下する気持は全然ない。それは一体どこから来ているかと

いうと、やはり宗教的な影響ではないか。アジア的な宗教から来る影響ではないだろうか、ということが結論になったわけであります。

先生方もご存じだろうと思いますが、ケインズの論文に「孫の代の経済学」というのがあります。その中で、ケインズがこういうことを言っている。司馬遷の「史記に現われる初期の時代から十八世紀の初頭にいたるまで、一般の生活水準はきわだった変化はなかった。浮き沈みは確かにあった。疫病とか飢饉とか戦争の襲来もあった。しかし、急激な経済的な変化はなかった」。その理由は一体どういうことかというところ、ケインズは技術革新がなかった。資本が不足だった。という二つのことをあげておるのでありますが、私は実際にはそうではなくて、アジア的な経済思考というもの、ヨーロッパ的な経済思考とは違うのだ、他の地域の経済思考とは違うのだ、というところが原因になっておるのではないかと考えておるわけであります。

日本人一人当り国民所得は、去年は千ドルを超え、千ドルになりました。アジアの一人当りの国民所得は、私、一九三〇年代からのものを調べたことがあるのですが、一九三〇年というのは大恐慌のあった年で、恐慌に入る前が六二・五ドル三八年が五七ドル、一九四九年がちょうど五〇ドルという状態でありました。これは私の計算でありまして、間違っておるかも知れませんが、大体その通りだろうと思います。五〇ドル、あるいは六二ドルにしても、一体それで生活し得る状態なのかどうか。われわれはインドの農村へ入ってみましても、またインドネシアの農村に入ってみましても、まったくまずしい形状を目にいたし

ます。それは想像を絶する状態です。食糧を備蓄しておくサイルなどほとんどもないのが一般のようであり、生活水準などといえる状態ではなくて、生活水準——生きていく最低線だと言えらると思うわけです。

そこで、国際的にみたアジアの人口と所得との関係は一体どうなっているかということですが、大ざっぱに申し上げますと、人口は中共もみんな入れてですが、五〇・一%。ところがGNPの比率は一三・七%。人口が世界の半分以上を占めているのにGNPの比率は一三・七%しかない。これは一九六一年の推定であります。その後のギャップはもっとひどいというわけです。ですから、アジアの人口比率は変らないとしても、GNPの比率はおそらく一三%を割っているのではないかと思うわけです。地域別にみましても、アジアの一人当たりが、一番低い一九六一年で八四ドルという低さであります。最近ようやく平均では百ドルになったかと推定されるのでありますが、しかし、まだ百ドルに満たない国が幾つかあるのであります。たとえば、インドとビルマとセイロンが一番低いのであります。インドは六五ドルくらいにしかありません。ビルマにいたっては五三ドルくらい。セイロンはちょっと高いのですがそれでも一〇三ドルでしかない。こういう状況のもとにあるわけです。このアジアの貧しさは、一体どこから来るのかということ、今までいろいろな学者が追究しておるわけです。

一つは自然的な条件という点からいわれておるそれからもう一つは人種的な条件、この人種的なというのは、植民地時代ヨーロッパ人が考えた、ヨーロッパ優越の立場から考えたものだろうと思

うのです。第三には比較歴史学的な立場から宗教の違いが、貧しさを固定化したというのであります。プロテスタントを中心とするヨーロッパ社会と、諦観的な宗教を主体とするアジアとでは発展に自から違いが生ずるものであります。

第四は、植民地の過程でおしえたという考えであります。ポール・バランという学者の『成長の経済学』という著書の中では、そのことを非常に明確に述べている。バランは富めるヨーロッパの搾取によって、アジアの貧しさの基底を作り出されたのだ。工業化の遅れもそれに基因するものと見ております。インドなどは曾ては工業国であった。たとえば綿紡にしてもヨーロッパに対してはインドが輸出国であった。それがランカシャの綿紡の発展によって、インドの綿紡がそれに押しつぶされたのだ。植民本国は自国の工業成長を維持するために、輸出市場を獲得することのためにインドの工業化を阻止する政策をとって来た。そのことが発展を阻害する大きな要因なんだということ、バランがかなり痛烈にいつているのであります。で、ヨーロッパが収奪しておったものももし仮りに、インドならインドに投入されているとしたならば、おそらく、今日のインドは大きく変わっていたであらう、とまで言っております。

こういう、四つの点が今まで指摘されて来ているわけです。自然条件というのは、いわゆるモンsoon地帯であるということの意味するモンsoon地帯は、いわゆる米作地帯であり、米の人口の扶養力は小麦に比較して非常に高い。従って、人口の稠密度が非常に大きくなったんだ。この生産様式は生活様式を規定する。水田地帯では交通が不便で、農業を機械化することが出来な

い。交通が不便だから大家族主義的な、いわゆる孤立的な農村社会というものが出来たのだ。一方機械化が困難であることから、工業化が遅れた、という一連の考え方があるわけであり、しかも、これに対しては、いろいろ批判もある。たとえば日本もモンsoon地帯ですが、日本の条件は違いますし、ラテン・アメリカではモンsoon地帯ではなくて小麦生産を主としておるのですが、低開発地域であることには間違いない。従って、こういう論理は間違いないである、という反論もあるわけです。

いづれにしても、今まで論じられて来たことはアジアがどうして貧しいのか、発展が遅れたのかという質問に対してはこういう四つの論点から答えられていたと思うのであります。

ところで、戦後のアジアの経済発展が一体どうなっているのかということですが、非常にはっきりしておりますことは、発展していくに従って、アジアという地域の中で格差が出来てきているということであり、戦前にはおそらく、一九五二年頃のアジアの一人当たりの所得というものは、それほど大きな開きはなかったのです。一人当たり五〇ドルと一五〇ドル、いわゆる三倍くらいの開きしかなかったのです。ところが、最近の状態は大きな格差が出て来ておるわけです。一番発展している国は台湾とか韓国とかタイとか、東の方に寄っている国が發展しておる。それから、ちょうど中間にあるのがマレーシアとかフィリピンとかパキスタン。一番貧しい、成長率が低いのがインドとビルマとセイロンであります。一番高い国と一番低い国、インド、ビルマ、セイロンを比較してみますと、大体三分の一か四分の一くらいの成

長率でしかない。こういう実情にあるわけです。一体、この発展の格差というものがどういうところから来ているのかということなんです。私たちが実際にみましても、労働生産性一つとってみても、台湾や韓国——実は韓国はついこの間、外務省の使節団の団長で行って参ったんであります。——それと、西の方のインドをみた場合、パキスタンをみた場合、かなり違うという感じがするわけがあります。

それは、一つは古い慣習、伝統的な慣習が頑強に残っている地域と、そうでない地域との違い。いわゆる、同じ資本が導入されても古い慣習、伝統的なものがあるかないかによって違うのではないかと、ということをつくづく感じておるわけがあります。

実は、そのインドの場合について申し上げますと、昨年の春、バンガロール、ここはデカン高原の南の端のところ、非常に風景の良いところがあります。その硝子の工場をみに行つたときの経験であります。その工場は非常に近代化されておいて、日本でもかなり大きな工場と比較して遜色のないくらいです。そこで従業員はいくらか聞いたら、千二百人くらいだ。それはインドの高級硝子の約四〇％くらい生産する工場です。日本の技師がおりました。日本ならばこれ位の工場は何人くらいで生産できるのかといったら、三百人くらいで十分だということ。そうしますと、日本の四倍の労働者が従事しているというわけです。確かに労働の質の問題もありませんし、それから生産量の問題、時間の問題、十二時になると労働はストップしてしまふわけです。それから午後三時でないとか作業を開始し

ないというのです。終りは何時だといったら五時だというのですから……。そこで、もっと労働強化をして生産をあげたらどうかということが問題になって、ボーナス制度というものをとつたというのです。時間によって割増を出す方法です。ところがその月末になって、労働者はこういうことはやめてくれという。何でかという、労働者の家庭は所得をブールする慣習があつて、自分で恣意的にそれを使うことができない。それから、同僚が、お前は今月は所得が多いから御馳走しろとかいうことで、むしろマイナスが大きくなる。そういう状態でボーナス制度も実現が出来なかつた。そういうことを言っておりました。とにかく、いろいろな事情がありましようけれども、インドとかビルマ、セイロンの低さというものは、そういう労働の質、労働量の問題、労働生産性の低さということが大きな原因をなしていると考えてるのであります。

ところで、それは一体何から来るかという、単なる労働の問題ではないわけです。その背景にあるものは、社会的な構造、文化的な条件、人間的な態度、いろいろな問題が入ってくる。それを経済的な条件だけで考えると、大へんな間違いを起しがちだという感じを受けているのであります。

私はアジアの経済発展の状況を高度成長型、平均成長型、低成長型、こういう三つのパターンに分けて、一体、それは何から来ているのかという分析を、今、やっているのであります。それは先ほど申し上げましたように、社会経済的なアプローチで、単に経済的な条件の分析だけではなく、政治の情勢はどうなっているのか、社会的な

構造はどうなっているのか、文化的な条件がどうなっているのかという、そういうものからみないと発展の動因のちがいが、発展を阻止している要因、発展を促進している要因を把握する研究に取り組んでいるわけでありませう。

そういう問題と、それから、アジアを全体としてみて、一体どうなっているのかという問題があるわけです。その点、アジアは大変な変化を遂げている。これは否定できないと思います。一九六〇年代の十年というものを、国連は「開発の十年」という計画をたてました。それは、国民総生産を各国とも年平均五％ずつ上げて行くことが目標とされている。その目標はどうやら達成されそうな状況にあります。まだ六〇年代を完全に終つたわけではありませんが、今までのところ六〇年代の後半のアジアの経済というものは、かなり好調なので、達成しておるといふことが言えるのではないかと思っております。

アジアの工業生産は年平均約一〇％くらいで、非常に早い発展を示しております。それは、何にもないところに行けるわけですから、今まで靴の生産がなかったところは、靴工場が出来れば、まったく新しい生産がおこるわけですから、工業の発展というものは高いのが当然ともいえるのです。各国とも工業化にはひじょうな努力をそいでいる結果であることはいうまでもないことであるのであります。

戦後、アジア諸国は大体一九五〇年代の初めにほとんど独立を達成したわけでありませうが、戦争が終つた頃の状態は、いわゆる植民地の抑圧から脱けたばかりのところでも何もなくに等しい状態でありました。

成田山大会から見る

今後の全日本仏教徒会議

座談会

出席者（五十音順）

白川良順師 第二部会長

神野真一師 第三部会長

鈴木敏範師 運営委員長

真溪義貫師 第一部会長

やっぱり花は咲かない

真溪 第一七回の全日本仏教徒会議成田山大会は、いままでと違って、マンモス大会でなしに——会場の都合もあってそうしたのでしょうが——できるだけ実のある会議を中心にした、という要望があったと思うんです。ところが、わたしに参加をして感じたことは、ただ、人数が、いままでよりも少なかったというだけで、会議の内容は一向に変わらないと思う。一番先に反省されるのはそういうことだと思えます。

根本的に考えると、仏教徒大会というものの意義はどこにあるのか、ということがまず反省させられた。というのは、全日本仏教会に入っている団体が百いくつがある。それらの中央機関で、文字通

り、仏教会の指導機関、あるいは連絡機関であるのに、出ている議題を見ますとめぼしい有力な団体からはほとんど提案が出ていない。同時に、団体の代表の方もひな壇に座るだけで、一番重要であると思われる部会というものにはほとんど出席しない。そうすると、一体、大会というものが、参加団体として重要な意義を認めていないのか、と痛感しました。

従って、各宗門には、自分自身のいろいろな問題があり、そういう大会にはなかなか出られないんだという考えもあるが、しかし、各宗門で宗制を運営していく上に、仏教界としてこれこそ重大な問題だ、これは宗門だけで解決すべき問題ではなくて仏教界全体が大衆討論の中で研究もし、討議もし、また世間に対してもアピールしていかなければならぬんじゃないかを感じるところがある。そういう問題が全然出てこないし、当局といった方が出てきて、部会の討論を通じて全仏教界の問題をしようという意欲もない。そうすると、全仏教徒大会というものが、どこに意義があるのか、ということになる。従って、提案をしたものを議決して、責任の所在が不明だ。全仏の事務局に責任があるとさえいえないのだからうけれども、しかし、全仏というものは、参加団体が、代

表的な人を理事にも出し、執行機関を作っているのだから、そうした人に責任がなければならぬけれども、その人が、一向に、大会に出て責任を取った態度を取らないところに、大会の根本的な意義がどこにあるかを再検討する必要があるんじゃないか。成田大会では痛切にそういうことを感じたんですが。

神野 同感です。いつも問題になりますのは、仏教徒会議が、会議なのか討論の場所なのか、フェデレーションなのか、お祭りなのか、ということですが。これは、過去一六回にわたって常に議論されてきたところじゃなかったかと思う。今回は、真溪先生のおっしゃる通りに、教師だけによる落ち着いた討論の場を持つのだというふれこみで大会が始まったのですが、いざやってみると、部会に費される時間は同じで、議案もなるべく少なくしほったんですけれども基調講演と基本議題というものが入ってきてしまいましたので、却って、ほかの議案については例年よりもはしょらなければならぬという点が多くなったと思うのです。議案等につきましても、すでにご発言のありましたように、大宗派というか、大きな団体からの提案はほとんどない。事実、大きな団体が出すことになりますと、ある程度、機関決定を経た上でなければ出せない

いので、個人即機関という団体でないという議論を出してこれない、ということとで、しっかりした加盟団体からの提案は非常に少なかった。従って、今回をみてみますと、加盟団体が行なっているところの行事、あるいは事業の報告的な議案、そして、それに協賛を求めめる議案、ひどいのは、加盟団体が自分のこれから行なうことについてPRをして資金集めをたやすくするような議案すら出てきた——ここでそういうことを申上げては失礼かもしれませんが——。こういった議案が出ていくなると、いわゆる、部会を開いて討論をするということは、毎年、無駄を繰り返しているのではないかという気がしないでもない。

討論にもっと時間を

時間をしばって部会で討論をしようとする、やはり、一議題については一時間ぐらいの時間を持たしていただくように、そして、一部会をせめて五〇人から一〇〇人程度の参加者でディスカッションができる状態になる。そうなりますと、議案をうんと減らすか、部会をうんとふやすかという限りはできないんですけれども、部会をふやすと、はたして、部会を構成するための諸事が全仏さんのほうで手当てできるものかという疑問も出てくる。同時に、一議題一時間ぐらいでディスカッションをしようということになって、今回のように発言が特定の人に限られるとなると——どうしても毎年特定の人に限られるが——一般の参加者はなかなか発言をしないでとんでもないほうにコースが曲っていったりもすることもあるんじゃないか、という懸念もあるわけです。

あるいは、それならば総会を開いて議題を上程して各部に付託をして、その結果の報告を翌日の総会にかけて採択をする、ということではなくて、むしろ、身延でやったような講演会を開いて、そのあとでパネル・ディスカッションをする。これを、三つなり、五つなりの会場を持ってやっというところのも一つのやり方ではないか。どうしても、部会を持って討論の場を持ちたいならば、この次は新潟ですが、二日目の午前中だった部会を持って、いんじゃないか。そして、二日目の午後に総会を持って、観光においでの方は、その晩はまずどこかで一緒に泊って懇親をして、翌日観光に行っていたら、正味二日かけても、せっかくの全日本仏教徒会議だからよろしいんじゃないか、ということを考えながらきょうは出てきました。

真溪 いま、神野先生からおっしゃったように、今年には会議というものを中心にしようということ、役員会においてはわざわざ三つのテーマに分けて、しかも三つのテーマにふさわしいと思われるような参考議案までつけて各団体に呼びかけたんだけど、なかなか集まってくれない。従って、出てきた議案は、神野先生のおっしゃったような議案で、はたしてテーマにふさわしいものかどうかさえ疑われるような議案が多かったわけですね。そこで、それで盛り上がりがないだろうからということで、テーマそのものを一つの議案として上程して、本部役員会の議決によって提案したわけですが、それに対しては、わたしは一部会をやったんですけれども、一部会の発言者の中にはそういう重要な問題についてはなかなか急にはいい考えも出てこない。

従って、それは、各宗派当局がどういふことを考えているか、あるいはやっているかというものを十分に調査をして、そういうものの報告を受けることが、われわれが発言を誘導してもらおう一つの資料になるのではないかと。そうでなければ、われわれが、いま突然にそういう問題について発言してもなかなかいい発言ができないのだということをいっていただくのが、そうなるかと、成田山大会というものは、議案を募集する、あるいは今年のテーマはこういうテーマだとPRする期間が少なかつたのではないかと感じるんだがそれはどうなんですかね。…… 仏教徒大会というものの意義と、それに対する仏教会との熱意というもののはたしてあるのかどうかの問題がある。毎年やっていることだからしかなかたなしに今年も、マンネリもいから形だけを整えようという気分、参加団体も主催者側もなっているんじゃないかと思うんだ。そういうことを成田山大会で、今年も同じだナという感じがしたんですがネ。

白川 わたしも全く同感です。さきほど、参加団体の中からもいい提案が出ないという話もありましたが、問題は、例えば、仏教界として大学問題をどう考えるか、安保の問題をどう考えるかという大きな問題がどうして徹底的に討議されたのか。わたしは等二部会です。わたしは夜を徹して議論されると思っています。ところが五時には終わってしまう。まことにもの足りない、といわれたんですが、かなりそういう意気込みを持ってきている人もいますね。いま、社会において問題となっていることに対して

果して欠陥は？

て仏教界はどう考えるかを徹底的に討議するような場がほしいと思いますね。そうすればそこでもう少し何かが出てくるんじゃないかと思う。

真溪 それは、やはり、全仏の組織そのものが、そういった仕事をやっていく組織じゃないと……。だから、全仏が何するにしても日頃から、そういう心構えというか、理事の皆さんが集まってもお互いに悩めることをぶちまけてそこでディスカッションをして、そこで大衆討議のかたちで仏教会の問題を解決していく姿勢がないんじゃないかと思うんだ。それが、大会をしても、ひな壇にさえ並んでいれば義理が果たせるといふ空気を作っているんじゃないかと思うんだ。

成田山大会の反省はこのくらいにして、さて、これからの仏教徒会議をどうするか——これは大事なことだと思えます。わたくしの考えるのは、いま上げましたように、仏教徒会議というものの意義を再検討することから出発しなければならぬと思うんです。ただ、それが、レクリエーションというような意味、あるいは、お互いに遠く離れていてめったにお会いしないが健在を意識し合うという、仲間のレクリエーションの意味の会議ならばそれでよろしい、その方法もあるだろう。そうでなくて、やはり、仏教というものが、コミュニケーションを固めていく、そして、非常に情報過多な社会において、宗教団体がカウンセラーとして大衆を指導していかなければならぬ立場からして、これもわからないことだ、あれもわからないことだとお互

実した部会にしようとするれば、どうしてもそこまで持っていかなければならぬ。これは全仏そのものの性格にもなるんですから、ちょっと簡単にいえないことですが、全仏がほんとうに事業団体になればまた違ってくると思います。ただ、教化事業というのは、各宗派でそれぞれ教義に基いてやっていることで、全日本仏教の理念に合致した面での事業ということがあると思うんですね。そういう面でかなり強い性格を出してくればそういうことが可能になってくるんじゃないかと思うんですが、全仏のあり方そのものが変わってこないとなかなかそこまですらないんじゃないですか。

真溪 国連と同じで、国連というのは世界の平和的な機構として最高のものでありながら決議まで持つていくのは大変だし、拒否権を出されればできないということ、強力なる支配力を持っていないだけども、今日の仏教が当面している問題は、やはり一宗派、あるいは一個人では解決されない問題がたくさんあるんですね。どうしても仏教徒が一丸となつて解決しなければならぬ問題があるんだから、宗派の伝導とか、宗派機構の運営というものはもちろん宗派それ自体がやらなければならぬが、そうでなくて、仏教全体に課せられた問題は、自分の終生を通じて痛感するものがあると思うんです。そういう問題を解決する場として仏教徒会議がやりたい気がするんですがね。どうでしょう。

神野 お説の通りで、全仏の機構という、いまの事務局のあり方では、正直、担当の組織内でお三方だけが動いているだけ……。それでとにかく全仏大会をやっていることとする。他の部局の後援は得

るんですが、それは非常にむずかしい。つい、前年度踏襲でやるのが一番簡単だし、特に今年には法輪閣の建設という問題を背負ってしまった関係から、全仏大会は、一応、去年のチョン、チョン、としていけばそれで終わるから、という気風がなかったでもない。問題は、各加盟の大宗門のほうでは、それぞれ自分のほうで、それぞれの教化活動もやっておいでになるし、また、法人その他もおいておいでになるし、いたれり尽くせりのことをなさつておいでになるので、あそこへ出ておいでになる方々で発言をなさる方々は、やはり大宗門の行政の一つの線に乗っておられないような方々が多いんじゃないか。ことにわたしども、地域の仏教会をやっていると、単立のお寺院方がわりあいご熱心であるということも、宗門とのたてのつながりがないからどうしても横のつながりで、それも仏単連が非常に弱体化してしまったもので、結局、東京なら東京の連合会をたての線として連絡を取っていくということ、単立の方々がずいぶん熱心になさつて下さる。また、大宗門の方々でもやつて下さる方々は、どうしても現在の当該宗派のかたちにあつては一応棚上げされている方々がお暇でいらっしゃるからやつて下さる線が多いんじゃないかと思うんです。

従つて、全仏について考えるんですけど、大宗門の方々は、大きい気持で、いい意味でのダンナになっていただいい意味で、二〇〇万なり三〇〇万なりの負担金を持つていただいて、役員には一応なつていただかないといけないでしょうが——財団法人ですから役員になつていただくとしても、実際の活動、あるいは活

動の志向する方向は、地域の仏教会や所属団体を対象として、宗門でなし得ないところを、それだけの資金を分担するんだという気持になつていただけるんじゃないかとわたしは思うんです。いまの、大宗門の二〇〇万や三〇〇万は、宗派予算の中では一パーセントにもならない微々たるお金ですからね。

反面、全仏の各種専門委員——評議員、理事は加盟団体から出てくるんですが——の中には、ご宗派やら団体やらに根を持つていないところの専門員さんがありあいに全仏のブレンとなり、あるいは手となり足となつて動いていただけるんじゃないか。わずかに組織局三人のスタッフですが、専門委員をもう少し多くお使いになれば、三人でやっている仕事をその方々にいくらかずつでも分担していただけるのではないか。これは、組織から出ている方々では無理だと思えます。フリーの立場におられる方々はある程度時間もあるし、組織に基いていないという気軽さもありますから。そうすればもう少しいまままでと変わったすがたの全仏大会が持たれていくのではないかと——このことをいうと、組織をお持ちの方々には怒られますが——。しかし、いま三宗門で、大きいところは三〇〇万くらいでしょう。

神野 法輪閣の負担を入れてそんなものですか。一パーセントにもならない額ですね。どちらも、多いという文句はいままで出てないでしょう。

連絡機関か、事業機関か

真溪 結局、全仏がする大会だから、全仏組織の問題も直接関係してくるわけ

ですね。いま全仏の組織を云々してもこれは急に改善しない。現在は現在でいいんだらうけれども——連絡機関で仕事をすべきではないという意見もあるだろうし、そうではなくて、神野先生のおっしゃるように、大きなところはダンナになつて適材適所に動員をして全仏教のためにする。全仏教会がよくなるのが各宗派それ自身がよくなるという、大乘的な、仏教本来の気持になることも一つの考え方だと思つていますが、いずれにしても、いままでの大会のやり方では中途半端だと思つて。レクリエーションにもならない。早く済めばいいんだということ。議案もどんどん進むし、つまらない議案——という失礼だが、これは関係ないという議案でも加盟団体が出した以上はむげに断わることとはできないという遠慮もしなければならぬ。そういうことでベターにならない。だから、議案が出てきたときに、大体、この会議は低調にいくか盛り上がるかわかつてしまふ。議案審査会でつまらないと考える議案でも、それはせめてタイトルをいくらか変えて議案らしくして出そうじゃないかというテクニックをしなければならぬ、ということでは盛り上がる大会にはならないと思うし、またその結果も決して望ましい結果にはならないと思つてすよね。それが一番の問題だと思つて。来年は長岡です。というのですがどうなんですか。ネ。そういうことが、全仏当局において大会の意義をもう一べん再検討しようということをやつてくれるかどうかということだ。そうでなければ、あれはあれでいいんだということならば何をかいわんやということだ。(笑)

(鈴木師加わる)

白川 これ、地方の仏教会など、今度の場合では成田山の方々は、初めてのことであるし、大変な努力を費されたことだと思えますね。だから、もっと意義あるものを持っていかねければなりませんね。それには、全仏として構想を練って……全仏としてはやっているわけですから――。

神野 持っていくところが、組織局さんとしても、なるべく組織の弱いところへ持っていく、全仏大会を通じて組織を強化していくというねらいでいきますから、前回の全仏大会に数人しか参加をしていないようなところが主催するようになり、どうしてもんやわんやになつてしまふ。

真溪 それはそうだね。しかし、それは一つ意味があると思うんですよ。大会そのものが低調でも、県仏というものができているのできていないのか、もしできていても、力が弱いところで大会をしていくということになると大会を通じて県仏が組織化することは一つのプラスだと思ふんです。だから、大会もマイナスの面ばかりではないんだけれども……そういう意味だけで大会をするのはあまりにももったいないと思ふんだ。

施政方針演説はいかが

どうでしょう、来年の大会は、例えば、理事長なら理事長が全仏の代表者で、仏教会が当面している重要な問題について、われわれ仏教会がこういう考えを持ち、こんな態度を持っているんだという一般演説を――国会における施政演説みたいなものをぶつんだよ。それは常務理事会で原稿を誰かが書く。当面せる

仏教会の重要問題について全日本仏教会はこのように考え、このように歩みたいと思うということをおアピールするんだね。それに対して、総会では初めに発言する人を募集しておいて、ペーパーならペーパーを、二分なり三分以内で発言する。そういうことで総会を一本盛り上げる必要じゃないかと思う。そうでないと、おえら方と称せられる者がひな壇にズラッと並んで、開会式が終るとスーツとお帰りになつてしまふのでは、部会の発言も聞かない、総会において、全仏の姿勢も発表しないから全然関心を持たない。わたしは、来年の大会は、開会式なんかは、式辞をズラズラとたくさん並べないで、簡単にして、全仏当局の方針を堂々と述べる、そうすれば、参加している者が、なるほどそういうところに

に仏教会の問題があるのか、これについてはわれわれも関心を持たなければならぬと考へると思うんです。それを来年の大会ではやってほしいと思ふますね。各部会における提案もちょっと多過ぎるよう思うね。むしろ、多ければ多いで、それを処理する方法を考えなければならぬと思ふんだ。社会福祉事業大会なんかは何万人と集まって、一〇〇も二〇〇も議案が出てしまふが、委員会で付記してうまいことまとめちゃう。そういうテクニクもあると思ふんじやよ。だから、総反というものをもう少し、セレモニーだけにしないで、国会における総会だつてみんなするんだから、ああいうものをやって仏教会における重大問題はここにあらんだということを示す。それを聞くことが必要だと思ふね。

鈴木 たしかに必要です。必要だ

し、それをさせることによって議場もわくし、皆、われこそ思う。
真溪 そうなんです。そういう人たちがまた、いい足りないことを部会でいってやるという熱意を持ってくると思ふ。

鈴木

それが必要です。

真溪 それはやはり、全仏当局の責任において話すんだから、演説は草稿を作って、常務理事会なら常務理事会の承認を得てするということならどうかと思ふんですよ。

神野

部会に、全仏の役員さんという方々が、皆、総花的にふりあててありましたが、わたしのところには山中先生一人だけがお座りでしたが、ほかのところはいかでしたか。

真溪

わたしのところも、県仏の会長さんが一人いた。彼は運営委員が何かのかたちで来ていた。

白川

わたしのほうは川崎大師の高橋先生と高尾山の山本先生がずつとお座りでした。

神野

その他の、常務理事さんのクラスじゃお座りになつていなかったみたいだね。

真溪

ぼくらの部会で、各宗門がやっておられる新しい伝導の方法なんかも聞きたいという発言があったんです。例えば、東西の本願寺はコンピュータを使つて、現在の教団の実態というものを一応調査しているわけです。そして、各任職の意識の程度、あるいは伝導ということについてまでコンピュータの会社に依頼して実態調査をしているんです。そういう結論なんかは皆聞きたがっていると思ふんだ。そういう場合に、東なら東、西なら西で誰かがあそこに出席して

いてくれればそれについて聞けるんです。それでも参考になるんです。当局はいいなし、また、発言者は参加団体のメンバーではあるけれども、全然責任者ではない人が多いんですよ。そうなら、決議されたものを、一体、誰が責任を持って実行するのかということなんだ。実行されない、実行されない、というけれども、そういうしくみになつていふんだよ。

鈴木

例えば、前には、部会でも結構火花を散らしてやったこともあるんですよ。この間は、そういう場面は第三部会しか知らない。

神野

第三部会も、議案そのものがなかった。第一部会にはぎやかだったでしょうが――。

真溪

にぎやかだが、極右と極左がいて、その議論が戦かわされただけ。例えば、靖国神社の問題に対しては、奉られてるのはほとんど仏教徒だ。それが国の機関で奉られることは何が悪い……。われわれの檀家も靖国神社に反対するなら、お寺を、墓まで持つていってしまうというのがある。われわれの困らないようにしてくれということもあつたし、そうではなくて、宗教の自由という立場から、国の権力によって宗教をやめさせるとか、宗教でないことを規制することは憲法違反だ。だから、あれは、国民すべてが自分の信仰のしかたにおいてお奉りできるようになかにしてもらうなら、国家が助成金を出すとか補助金を出すとかいうのは結構だ。しかし、あくまでも宗教の自由を根本にしてほしいという意見が戦わされた。

それから、安保の問題とか沖繩返還についてもいろんな発言がありました。

それについては、仏教というのはあくまでも平和を尊重する宗教なんだから、その仏教の本質に鑑みて、沖繩問題も安保問題も対処していくべきだという抽象的な結論で申し合わせてしまった。直ちにこの大会で、即時撤廃とかいう決議をすべきではないということでした。

鈴木 ほんとうは、安保問題等は、仏教者にとって相当研究してあったほうがいいか、ないほうがいいかといえ、いまの日本の立場からはなければならぬのですから……。

真溪 現実の時点で、ね。

鈴木 ええ。なぜ安保協定を結ばざるを得ないかということをよく納得しておく心がけが仏教者として必要じゃないかと思えます。ほんとうは、そういうものをそういう機会に詳しく説明してもらえばなおよかったですね。

真溪 そういう問題になりますと、喧々ごうごうなんです。特に第一回会においては両翼がいて、その問題だけで、徹夜でやろうなんていい出すのです。

神野 正直いうと、安保問題で一部会、北方、南方の領土問題で一部会、靖国問題で一部会、というぐらいにしなければ……。へたすれば、翌日持越しで、翌日の午前中までいくぐらいの熱意があればいいんですよ。

真溪 その晩でもいいんですよ。ほんとうにやりたい者だけでもいいから晩やればいい。その晩は五時に終わってしま、めしを食って、あとは勝手なことをしている。少ない時間だからほんとうに熱心な者は部会を続けましょうというも、いいと思うんですよ。特に、宗門大学

のステューデント・パワーの問題なんかはその問題だけでも大へんなんですからね。その暇もない。

鈴木 量より質ということでやったんだが、大した質も得られなかったね。

神野 わたしは例年より下ったと思えますよ。というのは、基調講演があつて、それに対する基本出題に部会のほうも大きな時間を取って、どうせ本論をして決定をするような議案も少ないからそっちへ重力をかけた関係で、実り方は例年より悪かったような気がしないでもないんですがね。

真溪 長いんだ。第一部会なんかよかつたんだが程度が高いからアクビが出ちゃうんだ。

神野 よそは聞かれないが――。

鈴木 金岡さんなんかは……。

白川 大学問題を取りあげたんです。が、質問が、本質的な問題でなく、ちょっと詰問のようなかたちになった。もう少しいい質問が出ればよかつたんです。

神野 大学問題を主として、第二部会の社会的実践ということにどういうふうに関係があるんですか。

白川 結局、大学問題というものは単に学生だけの問題ではない。彼らの意図するところは革命にある。だから一つの大きな社会問題になるわけですね。それに対して、彼らは、仏教寺院に対してもやがて押しかけてくるのではないか、その場合に一体どういう覚悟を持っているか、ということからぶつつかっていったわけですよ。

真溪 社会的事情の中にいようと思えばありますよ。

神野 松野先生の基調議案にだけはあ

る程度かみ合うかもしれないませんが、その他の議案についてはまるきり次元が違ふ。

真溪 この間、箱根のシンポジウムも、各部会で基調報告をすることになったが、それでは皆が聞けないからだめだ、総会でやれというんです。それでにわかに変えて総会でやつたんです。それは非常によかつた。

神野 身延でも、各部会の基調講演を一〇分ずつに詰めてやって、それから部会に分けた。

真溪 それがいいんです。あれを二〇分ぐらいにして三人でやらせるといいんだ。基調報告は各部会だけでなくて総会ですべきだったな、あれは失敗だった。箱根では宮本（正尊博士）さんが盛んにいつて変えたんです。皆が聞けないんじゃないよが、いいよ。

鈴木 たしかにそうですよ。

神野 鈴木先生は、第三部会の松野さんの講演をどういうふうにおかみ合わせになつたつもりでおいでですか。

鈴木 あれも、結局は、ほんとうの仏教会の組織強化ということにはあまり触れてなかつたようですね。話としてはうまかつた。われわれは布教するし、また、出てくる連中には昼時などごはんを出して――つまり、同じ釜のめしを食う、ところが、いまは、なかなかやらないですね。いなかのお寺あたりに行けば結構やっているところもあるようですが。

とにかく、終戦を契機にお寺の経営方針もガラリと変わりましたからね。

真溪 来年は、全仏当局の施政方針というものを総会でして、各部会の基調報告が必要であればそれも一〇分か一五分

ずつやってもらう。そして必ずしも学者でなくてもいいと思う。仏教会の実情をよく知っている者がやればいいと思うんです。学者は理論だけですからね。情報に対する処理にならないんだ。ほんとうの情報に即した回答をできるような人に頼んだほうがいいと思えますね。

組織強化は、精神面で

鈴木 それと、仏教会の組織の強化をするにはどうしても主流は経済問題で、各宗団を頼らざるを得ないわけです。しかし、精神面では、金だけ出しても、実際は、各仏教会あるいは地方の有志と、たえず、組織の交流の会合を持つ。そうしないと上のはうの人が全然無関心で――例えば、靖国神社法案で、仮りに全仏が総体の代表で反対陳状書を出していますね。これはもつともだと思えます。ところが、わたしのほうの宗派では、個人的感情で総長が反対だというわけです。それで宗報にのる。そういうことは、われわれでも、情においてははしのびないと思うが、いまの立場ではやはり反対せざるを得ないわけです。そういう点でも、わたしは、宗派の総長にもく下っているわけです。しかも堂々と宗報に出しているわけだからね。

真溪 各府県の仏教会は、いま、加盟しているのはいくつですか。

――三五です。

真溪 三五の府県仏教会の代表が皆来ましたか。

――いいえ、来ないです。

真溪 それが悪い。来てもらうといいんだがね。金もかかることだと思つて、これは、もう少し、大会のために金を集めて、遠くから来た人の旅館ぐらいいはこ

つちで持つぐらいにしないとなかなかこ
られないですよ。

鈴木 でも、ほんとうに来ようと思え
ば来られる地位の人ばかりですよ。それ
と、全仏の大会の度に、済むと、どこへ
行っても、晩はドンチャン騒ぎをしてし
まいますよ。そういう余分な金があつ
て、わずか七万か一〇万の会費が納まら
ないのは嘆かわしい、ということを生全
の連中によくいうんですよ。

神野 最低負担額は七千円か一万円
ですよ。

—— いまは県仏が二万円、各種団体
も二万円です。
真溪 三五が参加しているなら、とに
かく、一人なり二人なり来てもらわなけ
ればいけない。各宗派の参加団体の役人
代表者はちゃんと来てもらおうというこ
とが先決だね。総長が来られなければ代理
が来ればいいんだ。教化部長でも、代理
部長でもいいから、とにかく宗門を代表
するアグレマンを持ってきた人間に来て
もらわないといけない。そうでないとフ
ラフラした人間ばかり集まって鳥合の衆
が集まってやっているかたちになつてし
まう。関心を持たせるには、各府県の仏
教会や参加団体が責任を持って出してく
ればいい。だから、最初からちゃんと
出るようにやれやれというんだが……そ
して、やったというだが……。

神野 府県の仏教会なら府県の仏教会
で当面する議案をいろいろ出してディス
カッションをしようと思つても、その討
議にたえるような参加者がいないです
よ。高度過ぎて、といつては買いかぶつ
ていますが、やはり、府県の仏教会が当
面している問題というのは、そこに参加
しておいでの、一般の参加者のお考えに

なっていることよりも一歩も二歩も先に
進んでいる問題が出ますからね。

地方と都市の格差というか、これは坊
さんの社会では幅がありすぎるんじゃない
かと思えますね。

神野 格差というよりも問題が違うん
ですよ。都市の仏教会の当面する問題
と、地方の農村地区の仏教会が当面する
問題では、過密の問題と過疎の問題とい
つていろいろ全然違う。この間も、
団地布教といつても、団地布教って何だ
い。こんなことは聞いてもわからないと
いう県仏の方もおいでになる。

白川 結局、部会の議題を相当しぼつ
て徹底的に討議することがまず第一に必
要だと思えますね。そういうことから始
めて、さきほど来申請しているような全仏
の組織まで持つていくようにすればもう
少し実のある部会になるんじゃないかと
思いますがネ。

神野 発言の中でも申し上げましたよ
うに、白川先生と同じく、部会の数をふや
して、一部会二、三の議案について徹底
的に審議討論をするかたちがまず第一で
す。それがむずかしいということになり
ますれば、そこに出席されたところの議案
というものは、真溪先生がおっしゃった
ように、代議員によつて構成するところ
の、特別委員会というか、代議員会とい
うか、そういうもので小人数で徹夜討
議することにした。その他の参加者の
方々は講演会によるティーチ・インとか
ディスカッションという方法で、二本立
てにしていくという基本テーマは講演会
でやっていく。出された議案は代議員に
よる委員会付託という二本立てです。こ
の二つのどちらか、というつもりで考え
ております。

真溪 わたしは、できるだけ全仏が早
くテーマを決めてそのテーマを全部、要
綱ができなくてもいいから、テーマだけ
は早く、三月か四月頃に決めてしまひ、
今年是这样いこととするんだというこ
とで周知徹底する方法を考える。もし
て、決定された議案を、機関を通じて参
加団体にだしてもらう。それは、黙って
手紙をぶつけただけではだめで、前もつ
ていろんな機会に根まわして、あなた
の団体、あなたの宗派はこういうことを
してほしいというサデスチョンまでして
出してもらう。とにかく、議案の内容を
いいものにしてもらうことが大事だと思
います。

それから、さっきも申し上げたように、
総会においては、全仏当局の時局に対す
る姿勢を述べる。それに対して若干の質
問あるいは意見を求める。それから各部
会における基調報告が必要であればそれ
もごく短時間で総会が一般大衆に聞かせ
る。そして関心を高めることが一つじゃ
ないかと思うんですよ。

部会は、神野先生のおっしゃるよう
に、テーマをしばつて、どんなかたちでも
いいから責任ある人々によつて議案が審
議される、そうでないと無責任な決議に
もなつてしまうおそれがあるし、また、
決議されても決議のしつ放しになるおそ
れもあるの、出すほうも発言するほう
も、皆、責任をもっているというかたち
の実際ある部会にしていきたいと思いま
す。そういうことが来年の大会に求める
最小限度の要求だ。

鈴木 もう一つは、今度は量より質と
いうことでしたが、テーマに直属する議
題が、はたして三部会を通じて何題あつ
たかということですね。そういうことは

われわれも、責任を持って、切るべきも
のは切らなきやうそだと思つて。そ
して、ほんとうに質のある実行のできる
ようなものだけ——例えば、三部会で決
議されたことは、おそらく前と同じよう
に空々寂々じゃないかと思つているん
ですよ(笑)。

神野 そうなるだろうと思うから決議
できめるんだ。真正正銘やらなければな
らないと思うとなかなか決議もできない
(笑)。

真溪 それで、ぼくは、共同提案もい
いと思つて。一つのテーマをこつ
ちから、議案審査会なら議案審査会で決
めて、東西本願寺で出してほしい。説明
は各々の立場で、付記でもいいが、グル
ープでも出していいんじゃないか。全仏
の大会での問題がいかに超世間的、超時
代的なものばかりかということだね。

鈴木 それと、法要はもう少し簡単に
してもらつたほうがいい。

真溪 セレモニーは少なく、祝辞など
も、五人も七人もやつたら退屈する。総
理大臣や文部大臣の代読をしても聞いて
くれない。

真溪 祝辞よりも電報がいいですよ。

白川 短い文章でね。

真溪 文部大臣が電報を寄こした。代
読なんてつまらない。

白川 川島正次郎みたいに本人が来れ
ばいいが。
—— どもありがとうございます

× × ×

世界仏教徒連盟常任理事会

東京で開かれる

去る十月二日、三日千葉県成田市で第十六回全日本仏教徒会議成田大会の開催にあわせ、世界仏教徒連盟常任理事会が東京で、十月一日より五日までの会期で上野タカハラホテルで開催された。決議、出席者等次の通り。

出席者
タ イ ブーン妃殿下(会長)

タ イ サンガパン(事務総長)

タ イ ヤエゲソン(会計部長)

マレーシア テインチョー

セイロン ウイリアム

アメリカ ミヤバラスナラ

日本 来馬道断

1、第九回マレーシア大会における議事録と常任理事会の決定事項の承認。

2、WFB(世界仏教徒連盟)本部を永久にバンコックに設置する件は全員一致賛成し、一九七一年に着工予定。それまでに国内国外に積極的な募財活動を始めることになった。同本部の敷地は一エーカー半で駐車場を完備した二・三階建の建物となる。

これについては全日本仏教会も募金協力をするよう依頼があった。なお本部設立を記念して記念銀貨(約千円相当の通貨)と積尊の四大仏蹟をデザインした記念切手四種類の発行(図案は本部一任)その他の記

念行事を行なうことになった。

3、第九回WFBマレーシア大会についてオランダ、ドイツ、イギリスなど各国の支部センターから本部に感想と今後のあり方への要望があったが、これ等はアドバイスとして受け入れ、直接的な回答はしないことになった。

4、WFB規程の最新版におけるミスプリント訂正、また条項について一部変更の件。今まで会費納入等にはインド通貨単位のルビー使用をアメリカドル単位にあらためた。年間会費は各支部センター一口五〇ドル、新加入センターの入会金は最低五〇ドルとする。

5、WFBセンター新加盟の件として、本部としては一国一支部を原則としているので、それ以上の新加盟に難色を示している。ただしインドの場合は現在十一の支部があるが、これは多民族国家であり、現在でも十一支部間の横の連絡さえ充分でないことを考慮して、とくに今回申請のあったボンベイの仏教会(アンベトカール博士の創始した新仏教徒によって構成、運営されているアンタッチャブル中心の仏教会)については、

できうれば将来、ボンベイから最短距離にある既存のセンターに合併す

ることを条件に、一応新加盟を認めることになった。

6、第九回マレーシア大会決議事項のWFBエネスコ委員会設置の件については、本部として一応詳しい資料を添えてエネスコの認可団体になるよう申請しているが、エネスコ総会が本年十二月に開かれるので、それまで是非を待つ。現在各センターから二十四名の委員候補を推選して来ているが、その人選(十四名)と任命はWFB会長が行なう。

7、次回の常任理事会は一九七〇年五月一日、セイロンのコロンポにおいて開催を決定。

一九七一年五月セイロンで第十回WFB大会の開催が決定しているのので、従来の種々の問題点や、次期大会のスムーズな運営を期待して、約一年前に常任理事会を開くことになった。

8、WFB青年委員会をセイロン大会前に開く件はバンコックが会場にきまつた。

なお出席の各国代表は五日に京都、日光など見学してそれぞれ帰国したが、ブーン妃殿下は八日午後三時四十分羽田空港発のルフト・ハンザ六四五便で帰国した。

募集中!!

第2回インド・ヒマラヤ・アンコール仏跡・歴史・研修旅行団

費用 ￥388,000.-
期間 自昭和44年12月21日
至昭和45年1月10日
締切 昭和44年11月15日
申込及び 日新航空新東京ビル営業所
問合せ 東京都千代田区丸の内3-2
TEL 212-3477

《コース》

ニューデリー・ボンベイ・オーランガパード・
アジャンタ・ジャイプール・アグラ・ベナレス・
ブダガヤ・ナランダ・パトナ・カトマンズ・
カルカッタ・バンコック・シエムリエブ

昭和四十五年版

仏教徒手帳発行

◎申込み受付中

全仏総務局では、来年度の仏教徒必携「全仏手帳」を十一月下旬に発行することになりました。お申込みは全仏総務局（東京都中央区築地三―十五―一 一―一〇四）まで。

内容については次の通り

体裁 縦十二cm×横八・二cm

表紙 特製ビニール（黒）

内容 三帰依文、四弘誓願、六曜星刷込、

宗門聖日、仏教徒の人間像、宗派役員

都道府県仏役員住所録、各宗団役員

住所録、忌日忌早見表、各県宗教法

人事務主管部局一覧 その他

定価 二五〇円 送料別実費

第十四回全日本仏教会

福岡講習会開く

全仏文化局では、去る十一月八日福岡市九州大学仏教青年会館にて第十一回講習会を開催。九州各県より多数の参加がのぞまれている。尚、講師として梅原猛氏（元立命館大学教授）、白石通氏（福岡在住医師）のお二方。

枳尊成道会に

茨城県仏教徒会議開く

茨城県仏教会（会長川田聖見師）では、枳尊成道会の十二月八日初の県仏教徒会議が開かれることになり、県内仏教徒三千人の参加がみこまれている。

日本万国博覧会参加

「法輪閣」の上棟式

十一月二十六日建設を急いでいた万博参加「法輪閣」の上棟式が行なわれることとなった。八月十二日四天王寺出口常願師の導師のもとで行なわれた起工式より三ヶ月の突貫工事で、これで来年一月末か、二月初旬までに内装等の工事もすべて完了する見込みとなった。

おわび

成田山大会の報告を掲載の予定のところ紙面の都合で十二月号に変更いたします。よろしく御了承下さい。

第三回九州地区

仏教代表者懇談会開く

全仏組織局では、福岡で第十四回講習会を開くに際し、未加盟または未組織の各県に働きかけて第三回の代表者懇談会を開催することとなった。佐賀県、大分県ではその気運が高まりつつあり、今回の話し合いで全仏への加盟が実現するものと考えられ、強く働きかけることになっている。

二十日に

全仏評議会開催

本月二十日、全仏会長役員等の任期満了に伴い、評議員会および理事会が開かれる。主な議案次の通り。

- 一、全仏理事、監事の選出について
- 二、会長および副会長の推戴について
- 三、日本万国博覧会特別会計歳入歳出予算更正について

世界仏教徒連盟

機関紙（英文）

購読申込募集

パンコックにある世界仏教徒連盟で発行している機関紙「ニュースブリトン」の購読者を募集します。機関紙の大きさは二十六センチ×十九センチ。年六回発行。

購読料年一千円。

神奈川県仏教徒

会議開く

神奈川県仏教会（会長高橋隆天師）では来る六日曹洞宗大本山総持寺で県内仏教徒会議を開催することになった。全仏より阿部総務部長が出席した。

草葉 全弘師（全日本仏教会常務理事・高野山真言宗々務総長・三寶院住職）十月四日、心筋こうそおのため、国立京都病院で死去。六十三歳。

師は広島県出身。東洋大、高野山大卒業、高野山高校長、高野山真言宗教学、財務部長を歴任、四十年十二月より同宗務総長、全仏常務理事に就任。

尚、宗団葬は十一月四日高野山にて行なわれる。

草葉 全宜師（真言宗大覚寺派管長、大覚寺門跡）七月十二日脳軟化症のため大覚寺で死去。八十六歳。広島県出身。大正十五年古義真言宗々會議員、同宗財務部長等を歴任。昭和二十二年大覚寺門跡、同派管長に就任。

岡本 教海師（真言宗豊山派貫首）十月十六日慶応病院で、胆石症のため死去。

昭和四十四年十一月一日発行 発行人 伊藤勝淳 編集人 柳了堅

発行所財団法人 全日本仏教会